



市之倉だより

多治見市立 市之倉小学校 令和7年7月号
〒507-0814 多治見市市之倉町10-381
TEL 0572-22-3702 ホームページ <http://school.city.tajimi.lg.jp/ichinokura/>

※今回は本校代表となった主張作文を紹介します。勝手ながら紙面の都合上、一部省略させていただきました。

「当たり前」の日々を守るために

市之倉小学校6年 齊藤 零王

ぼくは最近、今までの「当たり前」がとても尊く、かけがえのないものであることに気づきました。GW明け、ぼくは習い事の最中に鎖骨を折りました。小学校生活最後の体育参観にも参加できないことがわかり、大きなショックを受けました。楽しみにしていたソーラン節、今年はセンターで踊ることを目標にしていただけに、ぼくの気持ちはどん底までしずみました。

また、骨折したことで、今まで当たり前に来ていたことができなくなりました。例えば、服を着ることも一人ではむずかしくて、家族に手伝ってもらっていました。今まで「当たり前」に来ていたことができない。「当たり前」に参加できると思っていた体育参観にも、参加できない。今までの日常は、決して当たり前ではなかったんだと、強く感じました。

不自由な生活を送る中、社会の授業で戦争についての動画を見る機会がありました。

「当たり前を当たり前と思ってほしくない。」その言葉が、ぼくの今と重なりました。その方は、今まで当たり前と思っていた生活が、核爆弾によって一瞬でなくなってしまったそうです…。

今、ぼくが話している間にも世界では戦争が行われています。戦争をしている国の人、当たり前が当たり前ではなくなってしまっています。ご飯を食べられなくなっているのかもしれない。親を亡くしてしまったかもしれません。家もなくなるかもしれません。ぼくは、誰かの「当たり前」をうばうことはあってはならないと思います。

ぼくは、鎖骨を骨折し、「当たり前」が奪われたとき、周りの先生が心配するほど表情が暗かったそうです。先生たちは、そんな僕に、何とか体育参観で活やくできる場所を作ろうと一生懸命考えてくれました。僕はそれがうれしくて、ショックで沈んでいた気持ちも少しずつ晴れ、前向きに参加することができるようになりました。家族も、忙しい中僕の送り迎えや日常のお世話をし続けてくれました。その中で、僕は思いました。

「少しの優しさや幸せを与え合うことができたなら、争いを起こそうという気持ちもなくなるのではないかと。」

僕は、骨折した時は一歩間違えればだれかを傷つけてしまいそうなくらい、気持ちが荒れていました。しかし、周りの人の優しさに触れていくうちに、荒れた気持ちも落ち着いていきました。そんな経験から、一人ひとりが少しの優しさを与えたり、与えられたりできる世の中になれば、大きな争いを止めることにつながるのではないかと、思ったのです。

今、ぼくたちは戦争がなく、平和な生活を送っています。「当たり前」に学校に通い、「当たり前」にご飯を食べ、「当たり前」に友達と遊ぶ…。ぼくが鎖骨を折り、当たり前の生活がくずれたのと同じように、いつ争いがおこり、ぼくたちの「当たり前」がなくなるか分かりません。

この幸せな「当たり前」の日々を守るために、少しの「優しさ」を大切にしていきたいと思います。ぼくは、この骨折を通して色々な人から優しさを与えてもらいました。だから、今度は、自分が与える立場になりたいです。ぼくが与えた優しさが、次の優しさにつながってほしいと思います。そうして、たくさんの優しさや幸せがあふれていくような世界を創り上げていきたいです。

代表の子だけではなく、それぞれの子どもたちは「考え」「意見」をもっていることでしょう。主張大会を機に、うまく言葉にできなくても、時々こうして自分と向き合う時間は大切なことだと感じました。